



半七捕物帳07

奥女中

岡本綺堂



青空文庫



文庫 青空

半月ばかりの避暑旅行を終つて、わたしが東京へ帰つて来たのは八月のまだ暑い盛りであつた。ちつとばかりの土産物を持つて半七老人の家をたずねると、老人は湯から今帰つたところだと云つて、縁側の蒲筵がましきのうえに大あぐらで団扇をばさばさ遣つかつていた。狭い庭には夕方の風が涼しく吹き込んで、隣り家の窓にはきりぎりすの聲がきこえた。

「虫の中でもきりぎりすが一番江戸らしいもんですね」と、老人は云つた。「そりやあ値段も廉やすいし、虫の仲間では一番下等なものかも知れませんが、松虫や鈴虫より何となく江戸らしい感じのする奴ですよ。往来をあるいていても、どこかの窓や軒できりぎりすの鳴く声をきくと、自然に江戸の夏を思い出しますね。そんなことを云うと、虫屋さんに憎まれるかも知れませんが、松虫や草雲雀くさむすぼりのたぐいは値が高いばかりで、どうも江戸らしくありませんね。当世の詞ことばでいうと、最も平民的で、それで江戸らしいのは、きりぎりすに限りますよ」

岡本綺堂

老人はしきりに虫の講釈をはじめて、今日では殆ど子供の玩具おもちゃにしかならないような一匹三錢ぐらゐの蟋蟀きりぎりすを大いに讚美していた。そうして、あなたも虫を飼うならきりぎりすを飼ってくださいと云った。虫の話がすんで風鈴の話が出た。それから今夜は新曆の八月十五夜だという話が出た。

「曆が違いますから八月でもこの通り暑うござんすよ。これが旧曆だと朝晩はぐつと冷えて来るんですがね」

老人は又むかしのお月見のはなしを始めた。そのうちにこんな話が出て、わたしの手帳に一項の記事をふやした。

文久二年八月十四日の夕方であつた。半七がいつもより早く家うちへ帰つて、これから夕飯をすませて、近所の無尽むじんへちよいと顔出しをしようと思つてみると、小さい丸鬚に結つた四十ばかりの女が苦勞ありそうな顔を見せた。

「親分。どうも御無沙汰をいたして居りました。いつも御機嫌よろしゅう、結構でござい
ます」

「おお、お亀さんか。久しく見えなかったね。お蝶坊も好い新造しんぞになったろう。あの子もおとなしく稼おっかあぐようだから阿母おっかあもまあ、安心だ」

「いえ、実はそのお蝶のことに就きまして、今晚お邪魔にありがとうございましたのでございますが、どうもわたくし共にも思案に余りましてね」

四十女のひたいの皺をみて、半七は大抵想像がついた。お亀は今年十七になるお蝶という娘を相手に、永代橋さわの際に茶店を出している。お蝶は上品な美しい娘で、すこし寡言むくちでおとなし過ぎるのを疵にして、若い客をひき寄せるには十分の価あたをもっていた。お亀もこの美しい娘を生んだことを誇りとしていた。その娘について何か苦労が出来たといえ、半七でなくても大抵の見当は付く。親孝行のお蝶が親よりも更に大事な人を見付けたという紛糾ごんきうに相違ない。稼業が稼業だけに、それをやかましく云うのも野暮やばだと半七は思った。

「じゃあ、なんだね。お蝶坊が何かこしらえて、阿母に世話を焼かせるというわけだね。まあ、ちつとぐらいのことは大目おおめに見てやる方がいいぜ。若い者のこった、ちつとは面白い

こともなけりやあ稼ぐ張り合いがねえというもんだ。阿母だつて覚えがあるだろう。あんまりやかましく云わねえがよかろうぜ」と、半七は笑つていた。

お亀は莞爾にこりともしないで、相手の顔をじつと見つめていた。

「いいえ、おまえさん。なかなかそんな訳じゃございませんので……。なに、情夫おとこでもこしらえたとかいうような浮いたお話なら、おつしやる通り、わたくしも大抵のことは大目に見て居りますけれども、どうもそれがまことに困りますので……。当人もふるえて泣いて居りますような訳で……」

「おかしな話だな。一体そりやあどうしたというんだね」

「娘がときどき影を隠しますので……」

半七はやはり笑つて聴いていた。若い茶屋娘が時々影をかくす——そんなことは殆ど問題にならないというような顔をしているので、お亀もすこし急せぎ込んだ。

「いいえ、それが情夫や何かのことはまるで訳が違いますので……。まあお聴きくださいまし。丁度この五月の川開きの少し前でございました。一人のお供を連れられた立派なお武家がわたくしの店のまえを通りかかりまして、ふと店にいる娘を見ましてふらふらと店へ

はいつて来たんでございます。それからお茶を飲んでしばらく休んで、お茶代を一朱置いて行きました。まことに好いお客様でございます。それから三日ほど経つと、そのお武家がまたお出でになりましたが、今度は三十五六ぐらいの品の好い御殿風の女の方と一緒でございまして。どうも御夫婦ではないようでした。そうして、その女の方がお蝶の名を訊いたり、年をきいたりして、やつぱり一朱のお茶代を置いて行きました。それから又三日ばかり経ちますと、お蝶の姿が見えなくなつたんでございます」

「むむ」と、半七はうなずいた。

かれらは一種のかどわかしで、身分のありそうな武士や女に化けて来て、容貌のいい娘をさらつて行つたに相違ない、と半七は鑑定した。

「娘はそれぎり帰らねえのかえ」

「いいえ。それから十日ほど経つと、夕方のうす暗い時分に真つ蒼な顔をして帰つて来ました。わたくしもまあほつとして其の仔細を訊きますと、娘が最初に姿を隠しましたのも、やつぱり夕方のうす暗い時分で、わたくしが後に残つて店を片付けておりまして、娘はと足先へ帰りますと、浜町河岸の石置き場のかげから、一、二人の男が出て来まして、いき

なりお蝶をつかまえて、猿轡さるくつわをはめて、両手をしばつて、眼隠しをして、そこにあつた乗物のなかへ無理に押し込んで、どこへか担いで行つてしまつたんだそうでございます。娘も夢中で揺られて行きますと、それから何処をどう行つたのか判りませんが、なんでも大きな御屋敷のようなところへ連れ込まれたんだそうで……。それも遠いか近いか、ちつとも覚えていなかつたそうでございます」

お蝶はそれから奥まつた座敷へつれて行かれた。三、四人の女が出て来て、かれの眼隠しや猿轡いましをはずして、両手の縛いましめをも解いてくれた。やがてこの間の女が出て来て、さぞびつくりしたろうが、決して案じることもない、怖がることもない、唯おとなしくして、わたし達の云う通りになつていれば好いと、優しくいたわつてくれた。年の若いお蝶はただおびえているばかりで、はかばか扱々しい返事もできないのを、女はなおいろいろ慰めて、まずしばらく休息するがいいと云つて、茶や菓子を持つて来てくれた。それから風呂へはいれと云つて、ほかの女たちに案内させた。お蝶はやはり夢中で湯殿へ行つた。

風呂が済むと、また別の広い座敷へ案内された。そこには厚い美しい座蒲団が敷いてあった。床の間の花瓶には撫子なでしこがしおらしく生けてあつて、壁には一面の琴が立ててあつたが、もう眼が眩くらんでいるお蝶には何がなにやら能くもわからなかつた。

この間の女が再び出て来て、お蝶に髪をあげると云つた。ほかの女たちが寄つて彼女の髪をゆい直すと、今度は着物を着かえろと云つた。女たちがまた手伝つて、衣桁いしこうにかけてある艶あでやかなお振袖を取つて、お蝶のすくんでいる肩に着せかけた。錦のように厚い帯をしめさせた。まるで生まれ変わったような姿になつて、お蝶は自分のからだの始末に困つて唯うつとりと突つ立っていると、女たちは彼女の手をひいて座蒲団のうえに押し据えた。それから経脚のようになっていゝ小さい机を持ち出して来て彼女のまゑに置いた。机のうゑには二、三冊の立派な本がのせてあつた。女たちは更に香炉を持つて来て机のそばへ置くと、うす紫の煙がゆらゆらと軽く流れて、身にしみるような匂いにお蝶はいよいよ酔わされた。秋草を画いた絹行燈がおぼろにとぼされて、その夢のような灯の下に彼女も夢のような心持でかしまつていた。

女たちは一冊の本を机の上にひろげて、お蝶にすこし俯向いて読んでいろと云った。魂はもう半分ぬけているようなお蝶は、なにを云われても逆らう気力はなかつた。かれは人形芝居の人形のように、他人の意志のままに動いているよりほかはなかつた。彼女はおとなしく本に向っていると、さぞ暑かろうと云つて、一人の女が絹団扇で傍から柔かにおおいでくれた。

「口を利いてはなりませんぞ」と、このあいだの女がそつと注意した。お蝶はただ窮屈そうに坐っていた。

やがて縁伝いに軽い足音が静かにきこえて、三、四人の人がここへ忍んで来るらしかつたが、顔をあげてはならないと、この間の女がまた注意した。そのうちに縁側の障子が音も無しに少しあいたらしく思われた。

「見てはなりませんぞ」と、女はおどすように小声でまた云つた。

どんな恐ろしいものが窺っているのかと、お蝶はいよいよ身をすくめて、ただ一心に机を見つめていると、障子は再び音も無しにしまつて、縁側の足音はしだいに遠くなつてゆくらしかつた。お蝶はほつとすると、腋の下から冷たい汗が雨のように流れ落ちた。

岡本綺堂

「御苦勞でありました」と、女はいたわるように云った。「もう当分は打ちくつろいでいてもよからう」

今まで薄暗かった行燈の灯はかき立てられて、座敷は俄かに明るくなつた。女たちが夜の膳を運んで来た。時分を過ぎてさぞ空腹ひもじかつたであろうと女たちが丁寧に給仕して、お蝶は蒔絵の美しい膳のまゑに坐らせられたが、かれは胸が一ぱいに詰まっているよう、なんにも咽喉のどへ通りそうもなかつた。かずかず列べられた見事な御料理にも彼女は碌々箸をつけなかつた。ともかくも食事が済むと、また少し休息するがよからうと云つて、このあいだの女はしずかにその席を起つた。ほかの女たちも膳を引いてどこへか消えてしまつた。

たった一人そこに取り残されて、はじめて幾らかの人心地のついたお蝶は、どう考えても夢のようで何がなにやら見当が付かなかつた。もしや狐に化かされているのではないかとも思つた。一体この人達は、どういう料簡で自分をここへ連れて来て、美しい着物をかしずきせて、旨いものを食わせて、こんな立派な座敷に住まわせて、みんなが大切そうに侍い

てくれるのであろう。芝居や浄瑠璃にあるように、わたしを誰かの身代りにして首でも打って渡すのではあるまいか、とお蝶はまた疑った。

なにしろ、こんな薄気味の悪いところは一刻も早く逃げ出したいと思つたが、どこからどう抜け出していいか、彼女にはとても方角が立たなかつた。

「庭へ出たらどこか逃げ路が見付かるかも知れない」

お蝶は一生の勇気をふるい起して、息を殺しながらそろりそろりと滑すべつこい畳の上を忍んであるいた。ふるえる手先が障子にかかると、出会いがしらに一人の女がはいつて来た。お蝶ははつと立ちすくむと、便所はばかりならば御案内すると云つて彼女が先に立つて行つた。縁側へ出ると広い庭が見えた。月のない夜で、真つ暗な木立のあいだに螢のかがが二つ三つ流れていた。遠いところで梟ふくろうの声もさびしく聞えた。

もとの座敷へ帰つてくると、いつの間にか其処には寢床が延べられて、雁金かりがねを繡ぬつた真つ白な蚊帳かやが涼しそうに吊つてあつた。このあいだの女がまた何処からか現われた。

「もうお休みなさがるがよい。ことわつて置きますが、たとい夜なかにどんなことがあつても、かならず顔をあげてはなりませんぞ」

岡本綺堂

手を取るようにして蚊帳のなかへ押し込まれて、お蝶は雪のように白い衾よぎにつつまれた。どこかで四ツ（午後十時）の鐘がひびいた。幽霊のような女たちは足音もせずと消えてしまった。に再びそつその晩がおそろしかった。

神経のふるえているお蝶はとても安々と寝つかれる筈はなかった。生まれてから一度も寝たことのない衾や蒲団の柔か味が、却ってかれに異様の肌障りをあたえて、ふわふわと宙に浮いているような一種の不安を感じさせた。おまけに其の晩は蒸し暑かつたので、かれの額や首筋には粘るよう気味の悪い汗がにじみ出した。お蝶は長い紅い総ふさのついている枕のうえに、幾たびか重い頭の置きどこを取り替えてみた。

そのあいだに何刻なんどきほど経ったか。かれは固もとより記憶していなかったが、唯さえ静かな家中がしんとして、夜ももう余ほど更けているらしいと思う頃に、次の間の畳を滑るような足音が微かに響いた。お蝶は惣身そうみの血が一度に凍るよう感じられて、あわてて衾を深くかぶって枕の上に俯伏してしまふと、墨塗りの縁ふちをつけた大きい襖がさらりとあいたらしく思われて、着物の裾を永く曳いているような響きが枕に薄く伝わった。お蝶は息をのみ込んでいた。

はいつて来たものは薄暗い行燈の傍わきにすうと立つて、白い蚊帳越しにお蝶の寝顔を覗いてゐるらしかった。生き血を吸いに来たのか、骨をしゃぶりに来たのかと、お蝶はもう半分死んだものようになって、一心に衾の袖にしがみ付いてゐると、やがてその衣摺きぬずれの音は次の間へ消えて行つたらしかった。怖い夢から醒めたように、お蝶は寝衣ねまきの袂で額の汗をふきながらそつと眼をあいて窺うと、襖は元のように閉まつていて、蚊帳のそこには蚊の鳴き声さえも聞えなかつた。

明け方になつて陽気がすこし涼しくなると、宵からの気疲れでお蝶はさすがにうとうとと眠つた。眼がさめると枕もとにはゆうべの女たちが行儀よく控えていて、さらにお蝶の着物を着替えさせてくれた。蒔絵の手水盥ちようずだらいを持つて来て顔を洗わせてくれた。あさ飯が済むと、このあいだの女がまた出て来た。

「さぞ窮屈きうくつでもあろうが、もう少しの辛抱でござりますぞ。退屈であろう、ちつとお庭でも歩いてみませぬか。わたし達が案内します」

女たちに左右を取りまかれて、お蝶は庭下駄をはいて広い庭に降りた。植込みの間をくぐつてゆくと、そこには物凄いような大きい池が青い水草を一面にうかべて、みぎわには

岡本綺堂

青い芒すすきや葦が伸びていた。この古池の底には大きい鯰なますの主ぬしが住んでいると、一人の女が教えてくれたのでお蝶はぞつとした。

「しッ」と、例の女が急に注意をあたえた。「池の方を見ておいでなさい。傍視わきみをしてはなりませんぬぞ」

何者かが何処かで自分を窺っているのだと気がついて、お蝶も急に身を固くした。主のひそんでいるという恐ろしい池を覗いたままで、彼女はしばらく突つ立っていると、やがてその警戒も解けたらしく、女たちはまた打ちくつろいでしずかであるき出した。

もとの座敷へ戻ると、お蝶はまた一刻いっしきばかりの休息をあたえられた。女たちは草双紙などを持って来て貸してくれた。午飯がすむと、一人の女が来て琴をひいた。六月はじめの暑い日に、決して縁側の障子をあけることは許されなかった。襖も無論に閉め切つてあつた。お蝶は体の好い座敷牢のようなありさままで長い日を暮した。夕方になると、ゆうべの通りに湯殿へ案内されて、帰つてくると今夜は別の着物に着かえさせられた。あかりがつくと、机の前にまた坐らせられた。今夜は誰も忍んで来て窺っているらしい様子は見えなかつたが、それでもお蝶はまだまだ油断ができなかつた。

「今夜もまた何か来るかしら」

おびえた魂をかかえて、彼女は今夜も四ツ頃から蚊帳にはいると、その晩は宵から細かい雨がしとしとと降り出して池の蛙がしきりに鳴いていた。お蝶はやはり眠られなかつた。夜もだんだんに更ふけて来たと思われる頃になると、自然か、人の仕業しわざか、枕もとの行燈がしだいにうす暗くなつて来たので、お蝶は眼をかすかに明いてそつと窺うと、白い襖から抜け出して来たような一種の白い影が、白い蚊帳のそとをまぼろしのように立ち迷つていた。

「あ、幽霊……」と、お蝶は慌てて衾をかぶつてしまった。そうして、ふだんから信仰する観音様や水天宮様を口のうちで一心に念じていた。小半刻も経つてから彼女は怖々のぞいて見ると、白いまぼろしはいつか消えていて、どこかで一番鶏の鳴く声がきこえた。

夜があけると、すべてきのうの通りに、顔を洗つて、髪をあげて、化粧をして、あさ飯が済むと庭へ連れ出された。夜になると、机のまえに坐らせられて、蚊帳にはいると、今夜も幽霊のようなものが枕もとへ迷つて来た。そうした窮屈と恐怖とに夜も昼も責められて、それが七日八日とつづくうちにお蝶は自分が幽霊のように痩せ衰えて来た。

「こんな苦しみをするくらいならば、いつそ死んだほうがましだ」

彼女はしまいにはこう覚悟して、このあいだの女にむかつて是非一度は家へ帰してくれと泣いて頼んだ。女もひどく困つたらしい顔をしていたが、悪くすると古池へ身でも投げそうなお蝶の決心に動かされたらしく、十日目の夕方には、とうとう一旦は帰れという許可をあたえた。

「併しこの事は決して他言はなりませんぞ。またそのうちに迎いに行くかも知れませぬが、その時はどうぞ来てくれるように……。今から頼んで置きますぞ」

さもなければ帰すことはならないと云うので、お喋もよんどころ無しに承知して、きつとまたまいりますと心にもない誓いを立てた。女はいろいろ心配をかけて気の毒であったと云つて、奉書の紙につつんだ目録をくれた。日が暮れてあたりが薄暗くなつた頃に、お蝶は目隠しをさせられた。口には猿轡を食はまされた。来た時とおなじような乗物に乗せられた。人通りの少ないところを選んで浜町河岸まで揺られてくると、石置き場のままで彼女を乗物からおろして、空からの乗物をついだ男達は逃げるように何処へか立ち去つた。

お蝶は狐が落ちた人のようにぼんやりと突つ立っていたが、急にまた何だか怖くなつて一散にかけ出して、家へ駆け込んで母の顔を見るまでは、彼女もまだ半分は夢のような心持であつた。狐に化かされたのだらうとお亀は云つたが、ふところに入れて来た目録は木の葉ではなかつた。迷子札まいごふだのような新しい小判がまさに十枚はいつていた。

「まあ、十両あるよ」と、お亀は眼をまるくして驚いた。いくら正直でも慾のない人間はすくない。この頃の相場では、妾奉公をしても月一両の給金はむずかしいのに、別になにをするでも無しに、美しい着物を着せられて、旨いものを食わされて、一日一両の手間賃になる。こんなありがたい商売はないとお亀は喜んでいたが、お蝶は身ぶるいして忌いやがった。一両はさておいて、一日十両の給金を貰つてもあんな怖いところへ二度とゆくことはまっぴらだと、かれはその後半月ばかりは病人のような蒼い顔をして暮していた。小判の顔を見てお亀も一旦は喜んだものの、よくよく考えてみると彼女もなんだか不安になつて来た。お蝶が忌がるのも無理はないと思われた。

「十両の金があれば店は閑ひまでも困らない。おまえはまあ当分は家に隠れていて、店へ顔を出さない方がよからうよ」

いつまた連れに来るかも知れないという懸念があったので、お亀は娘を店へ出さないことにした。すると、その月の末の夕方に、お亀が店をしまつてくると、留守番をしている筈のお蝶が姿をかくしていた。近所で訊いても誰も知らないと言つた。かならずこの間のところに連れて行かれたことと察したが、そのゆく先はもとより判らなかつた。お亀は思案ながらに其の日その日を送っていると、今度も十日目にお蝶はぼんやり帰つて来た。ふところにはやはり十両の目録包みを持っていて、すべてがこの間の話をくり返すに過ぎなかつた。

「なるほど、好い商法のようなだが、こいつはちつと変だね。お蝶坊が忌がるのも無理はねえ」と、この不思議な話を聞いて半七はひたいに小皺をよせた。

「すると、先月の末から娘がまた見えなくなつたんでございます。いつもわたくしの留守を狙つて来て、否応なしに担いで行つてしまふんだそうで……。外へ出れば乗物が待つていて、眼かくしをして乗せて行くんですから、どこへ連れて行かれるのか見当が付きません」

「そこで今度も無事に帰つて来たのかい」

岡本綺堂

「いいえ。それが帰って来ませんの」と、お亀は顔を陰らせた。「今度はもう十日の余になりますけれども、何のたよりもございませので、わたくしもいろいろ心配しておりますと、けさ早くに一人の女がわたくしの家へ見えまして……。それはこの間の御殿風の女でございます。仔細あつて娘を当分は音信不通の約束でこちらへ貰いたいと、こう云うんです。勿論、その代りに二百両の金を渡すというんですが、わたくしもまことに困りましたね。何んぼわたくしだつて、可愛い娘を金で売るわけにはまいりません。まして娘があれほど忌がつているものを、あんまり可哀そうでもございますから、一旦は断りましたんですけれど、相手の方はなかなか承知しないんでございます。無理でもあろうが肯きいてくれと、立派なお女中が手をつけて頼むんでしよう。わたくしも実に当惑してしまいました、なにしろすぐに御返事はできないから、まあ一日二日考えさせてくれと申して、ようようその人を帰したんでございますが……。ねえ、親分さん。こりやあまあ、一体どうしたもんでございましょう」

お亀は声をふるわせて、いかにも途方に暮れているらしかった。

「そりゃあ心配だろうね。今の話の様子じゃあ相手はいずれ大きい御旗本か御大名だろうが、なぜそんなことをするんだろう。茶店の娘だつて容貌きりようのぞみで大名の御部屋様にもなれねえとも限らねえが、それなら又そのように打ち明けて召し抱えの相談もありそうなんだが、少し理窟が呑み込めねえな」と、半七はしばらく考えていた。「それになにしろ肝腎の玉が向うに引き揚げられているんじゃあ、どうにもならねえ。おまけにその屋敷もどこだか判らねえじゃ手の着けようがねえ。困ったもんだ」

半七に腕を組まれて、お龜はいよいよ頼りのないような顔をしていた。

「娘がこれぎり帰つて来ませんようだったら、どうしましょう」と、彼女は二、三度も水をくぐつたらしい銚子ちぢみ縮で眼を拭いていた。

「だが、その御守殿風の女とかいうのが、いずれ一日二日のうちにまた出直して来るだろうから、ともかくも俺が行つて、それとなく様子を見てあげよう。その上で又なんとか好い知恵も出ようじゃねえか」と、半七は慰めるように云った。

「親分がいらしつて下されば、わたくしもどんなに気丈夫だか判りません。では、まことに勝手がましゅうございますが、あしたにもちよいとお出でを願いとうございます」

お亀はしきりに念を押して頼んで帰った。あくる日は十五夜で、晴れた空には秋風が高く吹いていた。朝早くから薄をすすき売る声がきこえた。半七は午前ひるまえにほかの用を片付けて、八ツ(午後二時)頃からお亀の家をたずねた。お亀の家は浜町河岸に近い路地の奥で、入口の八百屋にも薄や枝豆がたくさん積んであった。近所の大きい屋敷のなかでは秋の蟬が鳴いていた。

「おや、親分さん。どうも恐れ入りました」と、お亀は待ち兼ねたように半七を迎えた。「早速でございますが、娘がゆうべ戻つてまいりましたね」

ゆうべお亀が半七をたずねている留守に、お蝶はいつもの通りの乗物にのせられて、河岸の石置き場まで送りかえされていた。詳しいことは阿母おつかさんに話してあるから、おまえも家へ一度帰つてよく相談をして来いと、お蝶はかの女から云い聞かされて来たのであった。

こういう場合に本人を素直に帰してよこすというのは、いかにも物の判った仕方だ、先方に悪意のないことは能く判っていた。気疲れで奥の三畳にうとうと眠っているお蝶を呼び起させて、半七は彼女から更に詳しい話を聴きとつたが、やはり確かな見当は付かなかった。お蝶の話によつて考えると、その屋敷はどうも然るべき大名の下屋敷であるらしく思われたが、その場所も方角も知れないので、それがどこの屋敷だか見当が付かなかつた。

「今に誰か来るかも知れないから、まあ、待っていて見ようよ」と、半七も腰をおちつけて、そこに居坐っていることにした。

この頃の日晷ひあしはよほど詰まつて、ゆう六ツの鐘を聴かないうちに、狭い家の隅々はもう薄暗くなつた。お亀は神酒徳利みきや団子かたびらや薄すすきなどを縁側に持ち出してくると、その薄の葉をわたる夕風が身にしみて、帷子一枚の半七は薄ら寒くなつてきた。殊にもう夕飯の時分になつたので、半七はお亀にたのんで近所から鰻を取つて貰つた。自分一人で食うわけにも行かないので、お亀とお蝶の母子おやこにも食わせた。

飯を食ってしまったって、半七は楊枝ようじをつかいながら縁先に出ると、狭い路地のかさなり合あった庇ひしのあいだから、海のような碧い大空が不規則に劃しきられて見えた。月はその空の上にかかつていなかっただが、東の方の雲の裾がうす黄色くかがやいているので、今夜の明月が思いやられた。露はいつの間にか降りているらしく、この頃ではもう邪魔物のように庭さきにはうり出されている二鉢の朝顔の枯れた葉が、薄白くきらきらと光っていた。

「みんなも出て拝みなせえ。もうじきお月様があがるぜ」と、半七は声をかけた。

この途端に溝板を踏む足音がきこえて、一人の男がここの格子のまえに立った。お亀がすぐに出てみると、それは見識さむらいらない武士姿であったが、かれはお蝶母子が家にいることを確かめて、唯今お女中が逢いに来られると伝えて行つた。

「まあ、おれはいない積りにして置いてくんねえ」と、半七はあわてて草履をつかんで、お蝶と共に奥の三畳にかくれた。そうして襖の隙き間からそつと窺うかがっていると、やがてはいつてきたのは三十歳前後のやはり奥勤めらしい女であった。

「初めてお目にかかります」と、女はお亀にむかつて丁寧ていねいに挨拶した。お亀もおどおどしながら相当の挨拶をしていた。

「早速でございませぬが、こちらの娘のお蝶どのの身の上について昨日もほかの御女中がま
いって詳しいお話をいたしました筈。親御も御得心ならば、今夜からすぐにお越し下さる
ように、わたくしがお迎いにまいりました」

女は切り口上で云った。お龜はすこしその威に打たれたらしく、唯もじもじしていて、
はつきりした挨拶もできなかつた。

「今さら御不承知と申されては、わたくしどもの役目が立ちませぬ。まげて御承知くださ
るように重ねておねがい申します」

「娘はゆうべ帰りまして、それからなんだか気分が悪いとか申して、きょうも一日臥ふせつて居
りますので、まだ碌々に相談いたす暇もございませんで……」

お龜は一寸遁のがれの口上で、なんとか此の場を切り抜けるつもりらしかったが、相手はな
かなか承知しなかつた。女は嵩かさにかかつて又云った。

「いえ、それはなりません。篤とくと御相談くださるように、昨夜わざわざ戻してあげましたの
に、いま以て何の御相談もないというは、こちらの志を無にしたような致され方、それで

岡本綺堂

はわたくしはおめおめ引き取るわけにはまいりませぬ。娘御をここへ呼び出して、わたくしと三つ鼎みなであらためて御相談いたしましょう。お蝶がなえどのををすぐこれへ」

凜とした声できめ付けられて、お亀はいよいよよろたえていると、女は袱紗ふくぎにつつんで来た小判のつつみを出して、うす暗い行燈の前へ二つならべた。

「御約束の御手当ては二百両、封のまま唯今お渡し申します。さあ、どうぞ娘御をこれへ」

「は、はい」

「あくまでも御不承知か。お役目首尾よく相勤めませねば、わたくし此の場で自害でもいたさねば相成りませぬ」

彼女は更に帯のあいだから袋に入れた懐剣のようなものをと振り出して見せた。その鋭い瞳ひとみのひかりに射られて、お亀は蒼くなつてふるえ出した。掛け合あいはもう手詰めになつて来た。

「あの女はおまえ識っているか」と、半七は小声でお蝶にきくと、お蝶は無言で首を振った。半七はすこし考えていたが、やがて三畳から台所へ這い出して、水口からそつと表へぬけた。

路地のそとは月が明るかった。角から四、五軒さきの質屋の土蔵のまえには、一挺の駕籠が下ろされて、そこには二人の駕籠舁かじかきと先刻の武士らしい男が立っていた。半七はそれを見とどけて、今度は表の格子からはいつて来た。そうして、黙つて女のまえに坐った。女は受けあごの細おもてに薄化粧をして、眼の涼しい、鼻のたかい、見るからに男まさりとでもいいそうな女振りで、髪は御殿風の片はずしに結っていた。

「御免くださいまし」

半七は何げなく挨拶すると、女は黙つて鷹揚えしやくに会釈した。

「わたくしはこのお亀の親戚みよりの者でございしますが、うけたまわりますれば、こちらの娘を御所望とか申すことで。なにぶんにも婿取りの一人娘ではございますが、それほど御所望と仰しやるからは、御奉公に差し上げまいものでもございません」

お亀はびつくりして半七の顔を見ると、彼はつづけてこう云った。

岡本綺堂

「勿論、あなたの方にもいろいろの御都合もございませうが、いくら音信不通のお約束でも、せめて御奉公の御屋敷様の御名前だけでも伺って置きたいと存じますが、こりゃあ親の人情でございませう。どうぞそれだけをお明かじ下さいましたら……」

「折角でありますが、御屋敷の名はここでは申されません。ただ中国筋のある御大名と申すだけのことで……」

「あなた様のお勤めは……」

「表使を勤めて居ります」

「左様でございませうか」と、半七は微笑ほほえんだ。「では、まことに申しにくうございませうが、この御相談はお断わり申しとう存じます」

女の眼はじろりと光った。

「なぜ御不承知と云われます」

「失礼ながら御屋敷の御家風が少し気に入りませんから」

「異なことを……。御屋敷の御家風をどうしてお前は御存じか」と、女は膝をたて直した。

岡本綺堂

「奥勤めの御女中の右の小指に撥胝ぼちだこがあるようでは、御奥も定めて紊みだれて居りましよう
と存じまして」

女の顔色は急に変わった。

「御免くださいませ。たのみます」

格子の外で案内あないを頼む女の声がかきこえた。

四

「お出で遊ばしませ。まあ、どうぞこちらへ」

入口へ出たお亀がうろろうしながら、新しい女客を奥へ招じ入れようとする、案内を頼んだ女は少しためらっているらしかった。

「どうやら御来客の御様子でござりますな」

「はい」

「では、重ねてまいりましょう」

引っ返そうとするらしい女を、半七は内から呼びかえした。

「あの、恐れ入りますが、しばらくお控えくださいまし。ここにあなたの偽物がまいて居りますから、どうか御立ち会いの上で御吟味をねがいとう存じますが……」

はじめの女はいよいよ顔色を変えたが、彼女はもう度胸を据えたらしく、急ににやにや笑い出した。

「親分。お見それ申して相済みません。さつきからどうも唯の人でないらしいと思つていきましたが、おまえさんは三河町の親分さんでございしたね。もういけません。頭巾をぬぎましようよ」

「そんなことだろうと思つた」と、半七も笑つた。「実は表へまわつて見ると、御大名の御屋敷のお迎いが辻駕籠もめずらしい。奥女中の指には撥胝がある。どうもこれじゃあ芝居にならねえ。おめえは一体どこから化けて来たんだ。偽迎いも偽上使もいいが、役者の好い割にやあ舞台がちつとも栄えねえじゃあねえか」

「どうも恐れ入りました」と、女は頭をすこし下げた。「この芝居はちつとむずかしからうと思つたんですが、まあ度胸でやつてみるという氣になつて、どうにかこうにか段取りだけは付けて見たんですが、親分に逢つちや敵かないませんよ。こうなりやあみんな白状してしまえますがね。わたくしは深川で生まれまして、おふくろは長唄の師匠をしていましたんです」

彼女の名はお俊といった。母は自分のあとを嗣ついでがせるつもりで、子供のときから一生懸命に長唄を仕込んだが、お俊は肩揚げの下りないうちから男狂いをはじめて、母をさんざ

ん泣かせた拳句に、深川の実家を飛び出して、上州から信州越後を旅芸者でながれ渡つて、二、三年前に久し振りで江戸に帰つてくると、深川の母はもう死んでいた。それでも近所には昔の知人が残っているの、彼女はここで長唄の師匠をはじめ、少しは弟子もあつまるようになったが、道楽の強い彼女はとてもおとなしくしていられなかつた。詰まらぬい男に引つかかつて、金が欲しさに女つともたせ囹もやつた。湯屋の板の間もかせいだ。そのうちにお俊はこの近所の魚屋さかなやからふとお蝶の噂を聞き込んだ。

魚屋はお俊が懇意の家で、その娘はお亀とも心安くしているので、お蝶がときどきに怪しい使いに誘拐されてゆくと、この怪しい使いが自然にお俊の耳に伝わった。お蝶の容貌きりよう好しをかねて知っている彼女は、この怪しい使いを利用して、娘を更に自分の手へ誘拐しようといふ悪い料簡を起した。ふだんから自分の手先につかっている安蔵という奴に云いふくめて、二、三日まえからお亀の家の近所をうろついて、内の様子を窺わせているうちに、その屋敷からお蝶を一生奉公にかかえたいという掛け合に來たことも判つた。お蝶がゆうべ戻つて來たことも判つた。彼女は安蔵を供の武士に仕立てて、自分は奥女中に化けてお蝶

を受け取りに来たのであった。彼女がお蝶の前にならべた二百両は無論に銅脈の偽物であつた。

「なにしろ急仕事の偽迎いだもんですからね。ぐすぐずしていると、ほんものの方が乗り込んで来るかも知れないというので、無暗に支度を急いだもんですから、乗物までは手がまわらないで、飛んだ唯今のお笑い草となつてしまいましたよ」と、お俊はさすがに悪党だけに何もかも思い切りよくしゃべつてしまつた。

「それでみんな判つた」と、半七はうなずいた。「お前もこんなことで食らい込んだじゃあ嬉しくあるめえが、半七が見た以上は、まさかに御機嫌よろしゅう、はい左様ならと云うわけには行かぬえ。気の毒だが一緒にそこまで来て貰おうぜ」

「どうも仕方がありませんよ。まあ、いたわつておくんなさいまし」

併しこんな姿で引つ張つて行かれるのは、乞食芝居のようで困るから、どうぞ家から浴衣ゆかたを取り寄せてくれとお俊は云つた。半七も承知したが、ここではどうにもならないから、ともかくも番屋まで来いと云つて、お俊を引つ立てて出ようとするところへ、さつきから入口に立っていた女がはいつて来た。

「これが表沙汰になりましたは、御屋敷の名前にもかかわります。幸いに事を仕損じて誰に迷惑がかかったというでもなし、この女の罪はわたくしに免じてどうか御勘弁を願わしゅう存じます」

女がしきりに頼むので、半七は無下に跳ね付けけることも出来なくなつた。彼は女の苦しそうな事情を察して、とうとうお俊を赦してやることになつた。

「親分さん。どうも有難うございました。いずれお礼にうかがいます」

「礼なんぞに來なくても好いから、この後あんまり手数を掛けねえようにしてくれ」
「はい、はい」

お俊は器量を悪くしてすぐすぐ帰つて行つた。これで偽物の正体はあらわれたが、ほんものの正体はやはり判らなかつた。併しもうこういう破目はめになつては、なまじいに包み隠しても仕方があるまい、いよいよ相手の疑いを増すばかりで、まとまるべき相談も却つて纏まとまらないかも知れないと覺つたらしく、女はお亀と半七にむかつて自分の秘密を正直に打ち明けた。

彼女はお俊のような偽物でなく、たしかに或る大名の江戸屋敷につとめている奥女中であつた。主人の殿様は江戸から北の方にある領地へ帰つてゐるが、奥方は無論に江戸屋敷に残されてゐた。奥方には最愛の姫ひいさま様があつて、容貌きりようも氣質もすぐれて美しいお方であつたが、その美しい姫様は明けて十七という今年の春、疱瘡ほうそう神に呪われて菩提所の石の下へ送られてしまつた。あまりの嘆きに取りつめて母の奥方は物狂おしくなつた。祈祷や療治も効がなかつた。明けても暮れても姫の名を呼んで、どうぞ一度逢わせてくれと泣き狂うので、屋敷中の者も持て余した。その痛ましさと浅ましきを見るに堪えかねて、用人と老女が相談の末に、姫様によく肖にた娘をどこからか借りて来て、姫様に仕立ててお目にかけてらば、奥方のお気も少しは鎮まろうかということになつた。併しそんなことが世間に洩れては御屋敷の恥じである。あくまで秘密にこの役目を仕遂げなければならぬといふので、二、三人の人が手わけをして心当りを探してあるいた。

その頃の人は気が長い。そうして、根こんよく探してゐるうちに、用人の一人が永代橋の茶店で図らずもお蝶を見つけ出した。年頃も顔かたちも丁度註文通りに見えたので、かれは

岡本綺堂

更に奥女中の雪野というのを連れて来て眼利きをさせた。誰の眼もかわらないで、幸か不幸かお蝶は合格した。

いよいよその本人が見付かると、それをどうして連れてくるかということについて、屋敷内では議論が二つに分かれた。ひとの娘を無得心に連れて来るといふのは拐引同様の仕方であるから、内密にその仔細を明かしておとなしく連れてくるがよかろうと云う温かな意見もあった。しかし一方には又これに反対して、なにを云うにも相手は茶店の女どもである。いくら口止めをして置いても、果たして秘密を守るかどうか頗る不安心である。また後日ごにちにねだりがましい事など云いかけられても面倒である。すこしうしろ暗いやり方ではあるが、いつそ不意に引つさらつてくる方が無事であろう。何事も御家の外聞にはかえられぬと云う者もあった。結局、後の方の説が勢力を占めて、その役目を云いつけられた武士どもは、身分柄にもあるまじき拐引同様の所行しよぎやうをくり返すことになったのである。それほど苦心した甲斐があつて、その計略は見ごとに成功した。物狂おしい奥方は、替え玉のお蝶を夜も昼もときどき覗のぞきに來て、死んだ姫の魂が再びこの世に呼び戻されたものと思つていらしく、それからは忘れたようにおとなしくなつた。併しそれは一時のこ

とで、お喋の姿が幾日もみえないと、彼女は姫にあわせると云つて又狂い出した。さりとて人の娘を際限もなく拘禁して置くことはできないので、屋敷の者もまた困つた。

その矢先に又一つの新しい問題が起つた。それは此の年の七月から新しい布達ふだがあつて、諸大名の妻女も帰国勝手たるべしということになつたので、どこの藩でも喜んだ。一種の人質ひとじちとなつて多年江戸に住んでいることを余儀なくされた諸大名の奥方や子息たちは、われ先にと逃げるように国許くにもとへ引きあげた。勿論この屋敷でも奥方を領地へ送ることになつたが、乱心同様の奥方が道中に狂い出したらばどうするか。それがみんなの胸に横たわる苦勞の重い凝塊かたまりであつた。そこで評議がまた開かれた。その評議の結論は、どうしてもお喋を遠い国許まで連れて行くよりほかはないということに帰着した。

併し今度は殆ど永久的の問題で、さすがに無得心で連れ出すわけには行かないので、ともかくも本人や親許にも相談の上、一生奉公の約束で連れて行くことになつた。奥女中の雪野がその使をうけたまわつて、きのうも親許へたずねて来たのであつた。いつそ最初からあからさまに事情を打ち明けたら、こつちもまた分別のしようがあつたかも知れなかつたが、ひたすらに御家の外聞という事ばかり考えていた雪野は、何事も秘密づくめで相談

岡本綺堂

をまとめようと焦^{あせ}っていた為に、こつちの疑いはいよいよ深くなった。おまけに横合いからお俊のように偽迎いがあらわれた為に、事件はますます纏^{もつ}れてしまった。

そのわけを聴いてみると、半七も気の毒になった。子ゆえに狂う母の心と、その母を取り鎮めようと努めている家来どもの苦心と、それに対しても余りに強いことも云われない破目になった。

三畳の隠れ家からお蝶はそろそろ這い出して来た。かれは貫い泣きの眼を拭きながら云った。

「これで何もかも判りました。阿母^{おつか}さん、わたくしのような者でもお役に立つなら、どうぞそのお国へやっってください」

「え。ほんとうに承知して行っってくださいるか」と、雪野はお蝶の手をとって押し頂かないばかりにして礼を云った。

明月は南の空へまわって来て、庭から家のなかまで一ぱいに明るく映^さし込んだ。

岡本綺堂

「おふくろもとうとう承知して、娘を奉公にやることに決めましたよ」と、半七老人は云つた。

「それから又話が進んで来て、いつそ阿母おふくろも一緒に行つたらどうだということになりました。江戸には近しい親戚も無し、自分もだんだんに年をとつて来るもんですから、お亀も娘のそばに行つた方が好いという料簡りょうけんになつて、世帯をたたんで一緒に遠いお国へ行きましたよ。なんでも御城下に一軒の家を持たせて貰つて、楽隠居のようなふうで世を終つたそうです。明治になつて間もなく、その奥方も亡くなつたものですから、お蝶は初めてお暇ひまが出て、その屋敷から立派に支度をして貰つて、相当の家へ嫁とついだといふ噂ですが、多分まだ生きていますでしょう。お俊という奴は江戸を食いつめて駿府すんぶへ流れ込んで、そこでお仕置になつたとか聞いています」



半七捕物帳 07 奥女中
岡本綺堂 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本:「時代推理小説 半七捕物帳 (一)」光文社文庫、光文社
1985 (昭和 60) 年 11 月 20 日初版 1 刷発行

入力: tatsuki

校正: 湯地光弘

1999 年 6 月 4 日公開

2004 年 2 月 29 日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor: Tomoyuki Kawano

Tools: MacOS X 10.6.2(合成) + egword universal 2.0.2(本文、奥付)
+ Omni Graffle Professional (表紙)

Fonts: Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ